

# AIDS UPDATE

No.60 2005.11.7

広島大学病院  
エイズ医療対策室

内線5581（輸血部長室）

Internet: www.aids-chushi.or.jp

## 第19回日本エイズ学会学術集会・総会 2005年12月1日（木）～3日（土）於：熊本

□ 2005年12月1日（木）～3日（土）の3日間、第19回日本エイズ学会学術集会・総会が熊本で開催されます。今年19回目の会長をされるのは、熊本大学大学院医学薬学研究部感染防御学分野の原田信志先生です。熊本市市民会館および熊本市国際交流会館をメイン会場としています。

□ HIV/AIDSの臨床における最近のトピックスのほかに、今回のエイズ学会では、教育講演に「水俣病とハンセン病」が盛り込まれているのが特徴です。水俣病が発生した場所であることと、昔からハンセン病の療養施設があることから企画されたものです。これらの疾患が抱える様々な問題も、HIV/AIDSの問題と共通する部分があり、学ぶ点も多くあると言えます。

□ くわしい日程や演題、宿泊案内などが、HPに掲載されています。

第19回 日本エイズ学会ホームページ

<http://square.umin.ac.jp/aids19/>

## ACC1週間研修報告

原医研内科外来担当看護師 小川良子

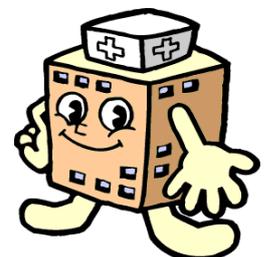
□ 10月3～7日の5日間、国立国際医療センターへエイズ研修に行って来ました。研修参加者は医師・歯科医師・外来看護師・病棟看護師・歯科衛生士の12名で、研修内容は講義と関連部署での見学や実習でした。

□ 日本全国でHIV感染患者の感染経路はここ数年男性同性愛者の感染率が高いとされていますが、一緒に研修した方たちの病院では必ずしも男性同性愛者による感染が多いわけではなく、その土地柄に特徴のある感染経路でした。例えば宮城県では遠洋漁業の方の感染率が高くなっています。また、長野県では五輪開催のために入ってきた労働者目当てにセックスワーカーがたくさん増え、そこから感染が拡大してきたそうです。そのためそれにまつわる感染予防指導や、家族指導が必要となり、広島とは違う話を聞かせていただきました。

□ 話題として、とくに、開業歯科医との連携が困難であることを感じました。日本で1番HIV感染患者が多いとされる新宿の開業医でさえ、HIV感染患者の診療を拒否しているところが圧倒的に多いということでした。歯科業界ではまだまだスタンダードプリコーションが浸透していないみたいです。このことは、私たちが普通に歯科医院に通院しても感染力の強いHBVをはじめ感染症にかかる可能性があるということを裏付けます。

□ 研修後、私は当院から開業歯科医に患者を紹介しなければならぬケースが生じました。しかし、広島でHIVを告白して紹介するには大変困難で受け入れてくださる所は少なく、患者には大変迷惑をかけている現状です。

□ これからも患者が増えると予想される中、開業歯科医をはじめ、地域との連携をどう築いていくか、新たに私の課題として加わりました。



## ～エイズ医療対策室だより～ カウンセリングの現場から 【後半】

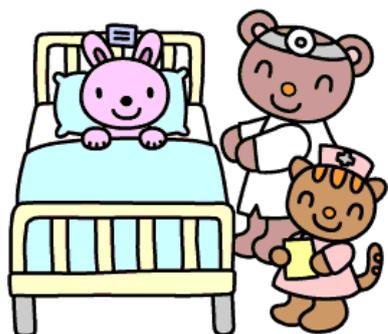
□ こんにちは。急に寒くなり、冬がもうそこまで近づいてきているようですね。季節のせいというわけではないでしょうが、このところ新規に感染が判明した方の来院が続く、エイズ医療対策室はあわただしくなっています。

□ 感染判明当初はもちろん、治療が安定している時期にも、患者さんやご家族・パートナーなどは様々な不安や困難を抱えておられることがあります。

□ 「いつまで生きられるのか」「高額の治療費がかかるのでは」「もう誰も愛し愛される関係は持てないのか」「生きる気力がわからない」など。患者さんの抱える幅広い問題に対して、全て一職種で対応することは難しいものです。エイズ医療対策室では、医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・カウンセラーのチームで患者さんを支えていこうとしています。

□ 5年前に私がエイズ医療対策室に加わったとき、最初に困難を感じたことは、患者さんやご家族のカウンセリングに対する「抵抗感」でした。精神科や心理相談室を訪れる方とは違い、身体的な治療を主な目的に受診されているのですから当然だったのかもしれませんが。カウンセリングを勧められると、「精神的に弱い人間が受けるもの」「何を話して良いのか分からない」などの抵抗を感じておられたようです。

□ どうすればカウンセリングへの抵抗感が少なくなるだ



ろうかと、写真入のパンフレットを作ってみたりもしました。また、医師や看護師もカウンセリングを積極的に勧められました。

□ 主治医に勧められて渋々ながらカウンセリングにやってきた方も何人かおられました。そのような方も、一度話し出すとそれまで表現できずにいた混沌とした思いを滔々と語られることが多かったのです。その内容は、パートナーとの関係の悩みであったり、未来への展望の持てなさであったりしました。そして「話してみてもなんだか気持ちが楽になった」「特に話すこともないと思っていたけれど、話してみるといろいろあった」とカウンセリングを続けて利用する方も増えてきました。

□ 現在は新規受診された方にはなるべく早い時期に当然のようにカウンセラーに会っていただいています。このような形にすることで、ほとんどの患者さんがカウンセリングを特別視せずに利用されるようになって来ました。

□ こうして活動していく中で、身体疾患を抱える方にとってもカウンセリングニーズが高いことを、ますます感じるようになっていきます。カウンセリングを行うことで患者さんの病気の受け止め方や医療への姿勢も変化していきます。これが患者さんが主体的に治療を受けることにも繋がっていくと考えています。そういう意味で、患者さんを支えるチームの一員として貢献していきたいと思っています。

【喜花伸子(臨床心理士)】

### <ご意見募集>

「AIDS UPDATE」は今後も不定期に発行します。ご意見やご希望がありましたら輸血部(558 1)までお寄せ下さい。

[TAKATA, OE]

[nobotaka@hiroshima-u.ac.jp](mailto:nobotaka@hiroshima-u.ac.jp)